

「落窪物語」の現実性

上條 かおり

『落窪物語』は日本版シンデレラ物語と言える。継母に虐待されていた主人公の落窪の君が、侍女・阿漕の活躍で道頼という素晴らしい男性と巡り会い、幸福な結婚をし、継母たちに復讐するという物語で、継子いじめの先駆とされている作品である。

小稿は、この物語の中で大変重要な役割を果たしている「阿漕」という女性に注目していくこととしたい。中納言の姫君でありながら継母・北の方に女中同然に酷使されている落窪の君に、阿漕はただ一人仕えていた女童である。シンデレラ型物語、つまり継子いじめの物語は世界各国で見られるが、どの物語でも登場人物は大体、主人公（継娘）・虐待者（継母や継母の妻の娘）・援助者・主人公の夫（身分の高い男性が多い）に分けられ、阿漕はこの中の援助者にあたる人物として描き出されている。

山室静氏の『世界のシンデレラ物語』（新潮選書）により、世界のシンデレラ型物語の代表として「サンドリヨン（ペロー／フランス）」「灰まみれの牝猫（パシレ／

イタリア）」「灰かぶり（グリム／ドイツ）」「蕪隈（中国）」「金のハゼ（タイ）」の五話についてこの援助者の在り方を調べてみると、この五話の物語の援助者たちは母親代わりの妖精であったり、死んだ実母が鳩や魚に姿を変えたものであったり、或いは亡き母の墓に植えた木などであり、いずれも何らかの超自然的な力を持っている点で共通している。又、この超自然的援助者たちは、いつも主人公のすぐそばに在る訳ではなく、主人公が継母たちに虐待され、危機に陥って泣いていると現れ、救ってくれる。特に継母にその国の王や王子が花嫁を選ぶ場である舞踏会や宴会、祭りなどに連れて行ってもらえず、主人公は超自然的援助者の力を借りて衣裳や靴を出してもらい、出掛けて行って王や王子に見初められるというパターンが多い。

それに対して『落窪物語』の援助者である阿漕は、超自然的要素を全く持っていないのである。虐待されている落窪の君には結婚した道頼を迎える支度が出来ない。そこで阿漕は和泉守の妻になっている叔母に手紙を書い

て几帳や夜具を借り、自分の一張羅の袴を落窪の君に着せ、食事の用意をして道頼をもてなす準備に奔走する。落窪の君が好色な老人・典薬助と結婚させられそうになった時も、機転を利かせてそれを防いだ。これらの援助はみな阿漕が自分で考え、自分で行動して行っているのであり、超自然的な現象は何一つ物語には出て来ない。

そこで小稿では、単なる女童にすぎない阿漕が何故超能力抜きでこれほどまで活躍しているのか、その点を先ず考察してみたい。

一、『落窪物語』の物語構成について

『落窪物語』の物語構成を前述の五話のシンデレラ型物語と比較すると、虐待事項は「眠る暇も無いほど縫い物をさせた」「落窪の間に住まわせたり、雑舎に閉じ込めたりした」「落窪の君という名で呼んだ」等で、これらは世界のシンデレラ型物語の虐待事項「女中同然にこき使われた」「住居が好ましくない」「ひどい呼び名で呼ばれている」等とが一致する点である。一致しないのは世界のシンデレラ型物語の報復事項がゆるやかだったり全く行われなかったりしているのに対し、『落窪物語』ではその報復事項にかなり物語の重点が置かれている点であらう。

『落窪物語』では、継母・北の方に対する報復は落窪

の君の夫である道頼によって行われている。しかしその復讐を詳細に検討してみると、これらの報復は落窪の君が結婚前に北の方から受けた虐待と実によく呼応して行われていると言える。すなわち、

①面白の駒を四の君と結婚させた(身代わり結婚させた)復讐。

道頼は中納言の四の君との結婚話が持ち上がった時、策略を企て、自分の叔父である「色は雪の白さにて、首いと長うて、顔つきただ駒のやうに、鼻のいららぎたること限りな」い「痴者」の「面白の駒」という人物を自分の替え玉にして北の方の四の君と結婚させた。その動機は、「かの少将(道頼)は、『北の方のいとねたく憎くて、いかでわびしと思はせむ』と思ひしみにければ、心のうちに思ひたばかるやうありて、『よかなり』と言ふなりけり。」であり、「(道頼)『女いかと思はむ』と思へども、まさりて憎しと思しおきてければなりけり。」と、四の君への同情の心が湧かないでもなかったが、それにも増して、落窪の君に対する北の方の所業が憎く、「少将(道頼)いとほしく、『女に恥を見するぞ』など思へども、『とくいかでこれが報いせむ』と思ひしほどに、とげて後に引きかへてかへり見むと思すこと深くてなりけり。」と、復讐を実行するのである。道頼の計略は成功し、身代わり結婚は三日夜の露頭で、やっと相手が面白の駒であることが分かる。これを「ヒリ与朝き、ハハ

らに物もおぼえず、あきれ惑ふ。「北の方、『あたらが子が、何のよしにてか、さるものにくれては見む』と

惑ひたまへば、「北の方も『取り放ちてむ』と惑ひたまへど、」と、北の方の惑乱は相当なものであった。ところでこの第一の報復は、かつて北の方が自分の叔父で「六十ばかりなる、さすがにたはしき」典薬助と落窪の君を無理やり結婚させようとした仕打ちに対処するものとして行われたと解される。又、道頼が面白の駒に入れ知恵して四の君に贈らせたとんでもない後朝の文は、四の君にひどい恥をかかせるが、この仕打ちも

死ぬる心地すること、かの落窪といふ名聞かれて、思ひしよりもまさる心地すべし。

との説明に明示されているように、北の方がかつて、君達とも言はず、御方とはまして言はせたまふべくもあらず。名をつけむとすれば、さすがに、おとどの思す心あるべしとつみたまひて、「落窪の君と言へ」とのたまへば、人々もさ言ふ。

という落窪の君に対する侮辱に対処しているのであった。とにかく、落窪の君との命名は、彼女の心をいたく傷つけた。

(落窪の君は)人(道頼)の聞くに恥かしく、「恥の限り言はれ、言ひつる名を我と聞かれぬること」と思ふに、

と嘆き悲しんでいるこういう虐待をしたことに対するこ

れは報復であることが物語の記述から明らかになるであろう。

②蔵人少将と道頼の妹・中の君との結婚(蔵人少将と三の君を離婚に追い込む)という復讐。

北の方は三の君の夫である蔵人少将を可愛がり大事にしていた。我が家の自慢の婿だったのである。そこで蔵人少将の衣裳を、眠る暇も無いほど落窪の君に縫わせた。この仕返しとして道頼は自分の妹とこの蔵人少将を結婚させ、結果として蔵人少将と三の君を離別に追い込んだ。すなわち、「道頼」『かの北の方、これをいみじき宝に思ひて、これがことにつけて、わが妻を懲ぜしぞかし』と思ふに、いと捨てさせまほしきぞかし。」と考えた。そして「北の方、落窪のなきをねたういみじう、『いかで、くやつのためにまがまがしき気せむ』と惑ひたまふ。『我はさきはひあり、よき婿とる』と言ひしかひなく、面おこしに思ひし君は、ただあくがれにあくがる。『よきわざ』とていそぎしたるは、世の笑はれぐさなれば、病ひ人になりぬべく嘆く。」の北の方の態度を不快に思い、「中将(道頼)せめて言ひそそのかして蔵人の少将を中の君にあはせたまへば、中納言殿に聞えて、いられ死ぬばかり思ふ。(北の方)『かくせむとて、我をすかしおきしにこそありけれ』とて、『いかでかいますだまにも入りにしがな』とて手がらみをし、入りたまふ。」と画策すると、北の方は「かかるままに、北の方

焦られ惑ひて、物もやすく食はでなむ嘆きける。」と衝撃を受け、「中納言殿は、かく少将（藏人少将）なりあがりたまふにつけても、三の君、北の方、『なか、なごりありてだに、時々来まじき』と、いみじくねためども、』どうしても「かひあるべくもあらず。」であった。継子いじめの話では、継母によって継子は無理難題を課せられたり、強制的に労働をさせられたりするが、『落窪物語』ではそれが裁縫であった。藏人少将・三の君夫妻のために言い付けられて、それがあまりに苛酷であったため、道頼は落窪の君を縫子として酷使していた北の方に、北の方が一番大切にしていた藏人少将を取り上げることで報復したのであった。ここにも北の方の仕打ちの裏返しの報復のパターンが認められよう。

③ 清水詣での際の車争い・局争い

道頼はお忍びで清水寺に行く途中の北の方一行と出会い、車争いをして牛車を壊す。その上、北の方一行の参籠する局までも奪った。北の方一行は、他に空いている局がなかったため、仕方なく一両の牛車に六人も乗ってその夜は過ごすはめになる。これは落窪の君が、「寢殿の放出の、また一間なる落窪なる所の、二間なる」に住まわせられ、「柵戸の廂一間ある部屋の酢、酒、魚など、まさなくしたる部屋の、ただ畳一枚、口のもとにうち敷き」た雑舎に閉じ込められていたことに対する報復である。それは、「苦しきこと、落窪の部屋に籠りたまへり

しにも、まさるべし。」という記述がその点を明らかにしている。

④ 賀茂祭の際の車争い

祭り見物のために、車を良い位置に置こうとして争いになる。典薬助がこのこと出て来て道頼を非難するが、道頼は過去の仕返しとばかりに家来の者に言い付けて典薬助を打擲した。典薬助はこれが原因となり、物語の最後で死ぬ。北の方にそそのかされて落窪の君を我が物にしようとした典薬助は、この事件で散々に懲らしめられ、すさまじいまでの報復を加えられた事になる。

⑤ 三条邸の横取り

落窪の君の亡き母が所有していた三条邸を、中納言は二年分の荘園から上がってくる収入を費やして改築した。道頼は出来上がった邸を落窪の君の手にあった地券によって横取りする。又、中納言家に仕えていた良い女房たちを自分の邸へ引き抜いてしまう。この報復は、北の方が落窪の君の持ち物をことごとく取り上げたことによる。その中で、落窪の君が持っていた蒔絵の鏡箱を取り上げた際、北の方は代わりとして古ぼけて所々漆のはげている鏡箱を落窪の君に与えた。この箱は報復の最後で北の方に返るのであるが、そのことによって北の方は今までの道頼の仕打ちが落窪の君と関係していたためであったということを知るのである。

以上、残酷とも思える徹底した報復ぶりは、所々の道

頼の言葉からも分かるように「北の方が落窪の君にした虐待」に対応するものであり、全てが「北の方を悔しからせるため」に行われている。よって落窪の君の父・中納言や三の君、四の君など巻き添えになった人々には道頼の手で別の恩恵が与えられていくことになる。又、「受けた虐待に対する報復」という部分は他のシンデレラ型物語には見られないものであって、ここに『落窪物語』の話の大きな特徴が認められるのではなからうか。

物語の構成上の特色として、次に幾つかの小道具が非常に効果的に使われているということが挙げられる。

北の方が落窪の君の鏡箱を取り上げる場面がある。北の方が代わりによこした鏡箱は「黒塗の箱の九寸ばかりなるが、深さは三寸ばかりにて、古めきまどひて所々はげたる」粗末な物であった。しかし、この古ぼけた鏡箱が最後の報復で大きな役割を果たすことになる。落窪の君が道頼の手によって救出された時、北の方はじめ中納言家の人々は留守だったので、道頼が落窪の君を連れ去ったのだということを知らなかった。だからその後道頼が様々な報復を行っても北の方には何故道頼が自分たちだけにひどいことをするのかその理由が分からなかったのである。ところが横取りした三条邸に運び込まれていた中納言家の荷物を返却する時、道頼はこの古い鏡箱も一緒に返し、落窪の君の素性を明かして昔受けた虐待に対する報復をしているのだということを知らせ、実に効果

的な働きをこの古い鏡箱はしているのである。

又、小道具とは言えないが、落窪の君の才芸として箏の琴と縫物の二つが設定されている。「母君の、六つ七つばかりにておはしけるに、習はし置いたまひけるままに、箏の琴を世にをかしく弾きたまひければ、「つくづくと暇のあるままに、物縫ふことを習ひければ、いとをかしげにひねり縫ひたまひければ、「落窪の君はこのどちらも素晴らしい腕前となっていた。そして箏の琴は北の方の息子・三郎君に教えていたため、三郎君はまだ小さい子供ではあったが落窪の君に同情的で、落窪の君が雑舎に閉じ込められた時には、阿漕に頼まれ、落窪の君に食事や道頼からの文を渡す役目をしている。一方、裁縫の方は

(北の方)「いとよかめり。ことなるかほかたちなき人は、物まめやかに習ひたるぞよき」とて二人の婿の装束、いささかなるひまなく、かきあひ縫はせたまへば、しばしこそ物いそがしかりしか、夜も寝も寝ず縫はず。いささかおそき時は、「かばかりのことをだに、ものうげにしたまふは、何の役にせむとならむ」と責めたまへば、

というように、上手であるが故に北の方に酷使されていた。しかし道頼に救出された後、道頼の衣裳を縫うようになってからは、

大將殿(道頼の父君)よりは、「少將の君(道頼)の御

装束、今はとくしたまへ。ここには内裏の御事に暇な
くなむ」とて、よき帛、糸、綾、茜、蘇芳、紅など、
多く奉りたまへれば、(落窪の君)もとよりよくした
まへりけることなれば、急がせたまふ。《中略》かく
て年かへりて、朔日の御装束、色よりはじめて、いと
清らにし出でしたまへれば、いとよしと思して、着て
あるきたまふ。御母北の方(道頼の母君)の見たまひ
て、「あなうつくし。いとよくしたまふ人にこそもの
したまひけれ。内裏の御方などの御大事あらむには、
聞えつべかめり。針目などの、いと思ふやうにあり」
と誉めたまふ。

などと彼女の幸福を招く重要な手立てとなっていく。
その他、文をやりとりするために「櫛箱」が使われて
いるし、落窪の君が典薬助と結婚させられそうになつた
時、阿漕が「焼石」を用いて防いだり、三条邸の横取り
の際に落窪の君が持っていた「地券」を使つたりする等
の場面もあり、それぞれの小道具を巧みに使用して物語
の展開を一層面白くしていると言えよう。

このようにこの物語の構成を見てくると、物語が大変
上手く組み立てられていることが分かる。虐待と報復の
呼応や小道具の使い方によって無理なく物語が展開して
いくのである。援助者である阿漕もその中しっかり位
置付けられており、不自然なところが無い。これだけス
ムースに物語の展開が出来れば超自然的な力を借りなく

ても特に差し障りはないはずである。だから阿漕は普通
の人間であり、実際の日常生活の中の人物たり得たので
はないだろうか。

二、継子いじめと「一夫一妻制」について

『落窪物語』の作者が「継子いじめ」を物語の題材に
選んだのはどうしてであろうか。

その理由として、この『落窪物語』に描かれているよ
うな継子いじめの話が現実のこととして当時存在してい
たのではないかということが十分考えられる。

物語の中にも継子いじめの話が実際にあったという記
述が見られる。「上のあやしう思はむは例のこと、御は
らからの君達さへみづから聞えたまはざめるこそ、いと
心づきなけれ。」「いかなる罪をつくりて、かかる目を見
るらむ。継母の憎むは例のことに人も語る類ありて聞く。
おとどの御心さへかかると。」又、『源氏物語』蛍の巻に
「継母の腹きたなき言物語も多かるを」とあるのはあま
りにも有名である。更に、落窪の君から孝養を尽くされ
た北の方の言葉に「人は生みたる子よりも、継子の徳を
こそ見けれ。」「いやいや継子の徳をなむ見る。さ知りた
まへれ。このあんなる子ども、ゆめゆめ憎みたまふな。
おのが子どもよりもかなしうしたまへ。おのれはむかし
憎まざらましかば、しばしにても恥を見、いたき目は見

ぞらまし。」と、憎みあう継母・継子の関係が世間の常識であったことも分かる。そして、「世にあらむ人、継子憎むな。継子なむうれしきものはありなむ」という言葉は、継子をいじめている世間の継母への忠告とも受け取れる。

ところで『落窪物語』の作者は、「このような継子いじめは一夫多妻制から起こった悲劇である」という考えの持ち主だったらしく、物語の中で一夫一妻制を強く主張している。

道頼は、落窪の君の不幸は落窪の君の父・中納言に二人の妻がいたという一夫多妻にあるとし、乳母が持って来た右大臣の娘との縁談を断る際、「古めかしき心なればにやあらむ、父母具したらむをともおぼえず。落窪にもあれ、上り窪にもあれ、忘れじと思はむをば、いかがはせむ。」と言い、「帝の御女賜ふとも、得はべらじ。はじめも聞こえしを、ただつらしと思はれきこえじとなむ思へば、女の思ふことは、また人まうくることこそ嘆くなれと聞きしかば、そのすぢは絶えにたり。」と主張しているからである。報復後の、道頼の中納言家に対する孝養も「殿も北の方（落窪の君）をいみじう思ひきこえたまふあまりの、まろまで来るぞと聞きはべる時もあり。『まろを思さば、この腹の君達を男も女も思ほせ』とこそ申したまへば、いみじきさひはひおはしける。」ため、数ならぬ景政らだに、女は見まほし、知らま

ほしくなむあるを、この殿は、すべて、この北の方（落窪の君）よりほかに女はなしと、内裏に参りたまひても、後の宮の女房たち清げなるに、たはぶれに目見られたまはず、夜中にも暁にも、かきたどりてぞまかだたまふ。女の男に思はれたまふ例には、この北の方（落窪の君）をしたてまつるべし」という道頼の態度にも、一夫一妻制の思想が色濃く強調されている。（このことは三谷邦明氏の御論考『落窪物語の方法―その享受と表現をめぐって―』にも述べられている。）そして道頼だけでなく、道頼の母君も「人あまた持たるは、嘆き負ふなり。身も苦しげなり。」「女子持たれば、人の思さむことも、いとほしう、心苦しうなむおぼゆる。」と述べ、一夫一妻が結婚の理想であると説いている。物語の途中に出て来る「まこと、この世の中に恥かしきものとおぼえたまへる弁の少将の君、世人は、交野の少将と申すめる」人に対し、作者は道頼に「かれは、いとあやしき人の癖にて、文一くだりやりつるが、はづるるやうなれば、人の妻、帝の御妻も持たるぞかし。さて身いたづらになりたるやうなるぞかし。」と批判させる。つまり作者は、道頼と比較することによって色好みを否定し、批判しているのである。

この主張に注目すれば、『落窪物語』の作者は、単なる空想の話としてではなく、当時の貴族社会に見られた現実の継子いじめを物語の題材として取り上げようとし

たのではないだろうか。もっとも継子いじめの物語は『落窪物語』成立以前にも全くなかった訳ではなく、民話や伝説といった世界で語り伝えられていたに違いないだろうと思う。しかし、物語の中で現実直視の観点で、超自然的要素を排除し、全てを現実のレベルで解決しようとしているのはやはり作者が実際に存在していた継子いじめの問題から目をそむけず、それを引き起こしていたであろう一夫多妻制を批判しようとの思想が基盤になっていたためであると思われる。

三、まとめ

『落窪物語』の中で、阿漕は援助者としての役割を果たす人物として登場している。しかも阿漕は他のシンデレラ型物語に見られるような超自然的要素は持っておらず、一人前の女房として認められてもいない「女童」であった。けれど阿漕が他のシンデレラ型物語の援助者たちと決定的に違っているのは「いつも主人公のそばにいた」という点である。他のシンデレラ型物語には、昼も夜も主人公のそばにいて継母の虐待からかばってくれたり励ましてくれたり慰めてくれたりする、阿漕のような働きをする者はいない。主人公はいじめられるといじめられるっぱなしであり、母親代わりの妖精や死んだ母の生まれ変わり等、亡き母の霊のようなものが突然現れる

(結局、超自然的要素を持つてることが必須)ということになる。現実が助けしてくれる人はいないのであるから、超自然的要素が出て来ないと話にならないのである。しかし阿漕は現実の人間としてその場に存在している。現実の人間である以上、援助をするためには超自然的な力に頼らず、自分で何とかしなくてはならない。私は、そこに他の物語には見られないような、単なる侍女にすぎない「阿漕」の活躍の理由があるのではないかと考える。『落窪物語』が成立した背景には、実際に継子いじめの問題があり、当時の一夫多妻制への作者の批判があった。だからより現実味を出すために超自然的な力を持った援助者の代わりに、侍女という立場の「阿漕」という人物を設定したのである。その単なる侍女にすぎない阿漕が活躍するためには、物語の構成を工夫し、無理なく物語を展開していかなければならない。そのために作者は落窪の君が北の方から受けた虐待に呼応させて道頼に報復を行わせたり、小道具を効果的に用いたりしたのであった。

つまり阿漕は「いつも主人公のそばにいた、シンデレラ型物語の援助者」という人物だったからこそ、こんなにも活躍しているのだと言えるだろう。

付記 この論稿は、卒業論文をもとに執筆したものである。

(かみじょう かおり 長野県寿台養護学校教諭)